

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350405

研究課題名(和文) 美術館における言語教育プログラムの国際比較：マルチカルチュラルな美術館への提言

研究課題名(英文) International Comparative Research on Language Educational Programs at Art Museums:  
A Proposal of Multicultural Art Museums

研究代表者

木下 綾 (Kinoshita, Aya)

東海大学・外国語教育センター・講師

研究者番号：10609407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀における美術館の新しい役割を分析した。グローバリゼーションが進み、21世紀に入り新しく地域社会に参加する人々を対象にアートを用いた言語教育プログラムを提供する美術館が出てきた。長期的な取り組みを行っている美術館として、教材を出版したプログラムに焦点をあて、アメリカ・オランダ・デンマーク・日本で現地調査を実施した。プログラムの目的、企画、運営、カリキュラム、成果に関して、特徴を比較分析した。グローバルに移動する人々が多様化する21世紀に、美術館はアートを用いて、変化に適応する人、そして受容する人にとって、エンパワメントや相互理解の基盤を形成することで社会に貢献することができる。

研究成果の概要(英文)：It is a research of a new function for art museums in 21st Century. Because of globalization, there are some museums which have started new programs for new comers to the society. In order to focus on long-term programs, I looked into the ones which have already published textbooks or teaching materials. Including the fieldwork in U.S., Netherlands, Denmark, and Japan, the purposes, initiatives, organization, curricula, and outcomes were analyzed and their characteristics were compared. In the time of various people on the global move, art museums can build a base for the people adapting and/or accepting changes to empower themselves and help mutual understanding.

研究分野：アーツ・マネジメント

キーワード：美術館 グローバリゼーション モビリティ アート 言語教育 移民

## 1. 研究開始当初の背景

比較的新しい学問分野であるアート・マネジメント研究は、文化政策、財政、都市計画、市場経済、芸術機関経営などの分野から多角的にアプローチされている。美術館教育プログラムの研究は、芸術機関経営研究のひとつであるが、教育や文化政策など多分野と密接に関連している。

後藤は『文化と都市の公共政策』(2005年)で、文化政策策定の理論的枠組み、政策実施を支える財政、政策評価を海外の事例とともに論じている。そして日本で導入された指定管理者制度については小林、中川などの研究(2006年)があり、美術館に限らず劇場などを含め日本の公立文化施設の現状と問題点が提起されている。美術館に限定したものには、『美術館政策論』(根木、枝川、他 1998年)があり、日本の博物館法、文化財保護法、学芸員制度などの歴史と現状、課題が論じられている。さらに、『ミュージアムが都市を再生する』(2003年)で上山と稲葉は博物館の果たせる新たな役割を都市の活性化に見だし、改革案を提示した。また、美術館の現状を美術史と建築史の観点から分析した並木と中川の『美術館の可能性』(2006年)には、美術館の概念、制度、そして空間に関して事例を挙げつつ具体的に検証が行われている。

上記の研究により、美術館の存在意義、日本における関連法令や政策の在り方、経済的支援の理論と方法、そして現状と課題が明らかにされている。本研究は海外および日本の美術館の事例を取り上げ、それらの事例から21世紀の美術館に提示できる教育プログラムや施策を求めるものである。

欧米では美術館経営は美術史や博物館学で扱われてきた歴史がある。近年の代表的な研究では、MacClellanがInventing the Louvre(1994年)で、美術史家の視点からルーヴル美術館の成立をフランス革命や18世紀の美術界といった社会的条件も含め分析した。Weil(Reinventing the Museum, Anderson ed. 2004年)は博物館の機能に関する新しいパラダイムの出現を指摘し、コレクションの収集・保存・研究機能に置かれてきた重点が、ビジターとのコミュニケーション機能に置かれるようになり、その結果コレクションの方針転換も引き起こされることをスミソニアンハーシュホーン美術館の例で示した。最近では経営学の分野で、Hagoort(2003年)が起業家的経営戦略をアートに応用するモデル提示を行い、Suchy(2004年)が変革の経営における館長の役割をリーダーシップ論で検証した。また、経済学からはThrosbyがEconomics and Culture(2001年)において、経済的価値と文化的価値を併せ持つ「文化資本」の概念を提唱した。美術館も含めた文化産業が都市に及

ぼす影響や観光・貿易との関係も指摘している。さらに、美術館教育の分野ではHein(1992, 1998, 2012年)が、学習者が自ら意味を構成すると考える構成主義という学習理論に基づき、博物館におけるビジターが個人の体験や自分の属する社会集団の価値をベースに意味を構成することを主張している。

これらの先行研究が本研究の背景および基礎となっている。

また、自ら手がけてきた近・現代美術館経営の研究では以下のような教育プログラムを取り上げた。「ルイジアナ近代美術館における『子どもハウス』」(2007年)において、家族参加型プログラムから美術館のビジョンと時代の変化を分析しコミュニケーションという機能の重要性を検証した。「アウトリーチする美術館」(2007年)では、難民児童を対象に実施された教育プログラムから美術館にとってのコミュニティという概念の定義と、美術を通して参加者のアイデンティティ確立過程への貢献を検証し、同時に多様なビジターによって作品が新しい評価を獲得する可能性を示唆した。東海大学外国語教育センターでは、語学教育という新しい角度から美術館教育の研究に着手した。「美術館を利用したESL(第二言語としての英語)プログラムに関する一考察」(2011年)ではアメリカのポール・Getty美術館のカリキュラムを事例に、ネット上で公開されているカリキュラムと教材の活用価値を分析し、美術館および視覚素材のグローバルな活用方法として評価した。「アムステルダム市『町と言語』第二言語教育プログラム」では、アムステルダム市が行っている移民政策の一環として市内の博物館で実施している言語教育プログラムを取り上げ、プログラム担当者にインタビューを行い、市と協力して実施に至る過程やプログラムの開発、実施における工夫や、今後の展望まで聞き取ることで、一つの言語教育プログラムの先行事例を提示した。本研究は、このような事前調査を踏まえて、三年間でさらなるデータ収集・分析、理論枠組み構築、成果発表を実施した。

## 2. 研究の目的

20世紀後半に入り世界中に数多く設置された美術館は、収集・保存、研究・調査、公開・教育といった役割を果たしながら、他の文化施設や娯楽施設と競合し、自らの存在意義を議論してきた。そして美術館の活動は建物の中で完結するものではなく、コミュニティとのつながりを重視し社会への貢献活動を実施するようになった。美術館が実施している各種プログラムに、それは反映されている。特に教育はその顕著な分野である。教育プロ

グラムは今日多くの美術館で様々なプログラムが企画・提供されている。その中でも、比較的新しいプログラムとして美術館における言語教育プログラムがある。それは、美術作品あるいは美術館という空間を用いて、第二言語の理解力・表現力を育成することを目的とする。対象となるのは移民や留学生が多く、プログラムを通して新しい社会で言語能力を獲得すること、その地域の芸術文化について理解を深めることが促進される。

本研究は、美術館における言語教育プログラムの事例研究から、21世紀の美術館が果たす社会的役割を明確にすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

文献、統計、インタビュー、現地調査を実施した。組織的に言語教育プログラムを実施している所はあまりなく、各美術館が独自に開発しているプログラムが多いため、現地で資料（特に教材）を収集し、担当者にインタビューした。アメリカ、オランダ、デンマーク、スウェーデン、日本で実施した。以下が主要な調査先リストである。

#### アメリカ

J. ポール・ゲッティ美術館  
ハーヴァード大学美術館  
メトロポリタン美術館  
テネメント・ミュージアム  
VUE（VTS ワークショップ）  
アメリカ博物館同盟（AAM）

#### オランダ

アムステルダム市  
ステデライク近代美術館  
Foam 写真美術館

#### デンマーク

ソロ美術館  
ルイジアナ近代美術館  
デンマーク統計局  
ヨーロッパ・ハウス（EU 情報センター）

#### スウェーデン

カルマル博物館  
マルメ大学 移民・多様性・福祉研究所  
IMSCOE 移民学会

#### アイスランド

アイスランド大学 UNESCO ヴィグディス多言語・多文化国際センター  
アイスランド外務省

#### 日本

徳島県立近代美術館  
京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター

また、各年度、研究成果を論文や学会などの場で発表し、専門家によるフィードバックやディスカッションを通して、理論枠組みやデータ分析の精緻化を進めた。

### 4. 研究成果

三年間の研究期間において、21世紀の美術館が果たす新しい社会的役割の一つを「言語教育プログラム」を通して明確にし、提示することができた。理論的な枠組みとして、コンテンツ（作品・展覧会）情報、美術館そのものの移動に加え、人々は様々な目的（旅行、出張、留学、駐在、移住など）で、より頻繁に速く移動するようになった「グローバル・モビリティの時代」であることを設定した。平成 27 年度の夏には、北欧で現地調査中にシリアなどから EU 圏への移民の大量流入が起こり、北欧まで電車で移動する移民たちを目の当たりにした。「言語教育プログラム」は、こうした社会的変動に応じてますます必要性が高まるだろう。結論として、「グローバル・モビリティの時代」における美術館は、参加者が作品の鑑賞や解釈を行うプログラムにより言語能力の向上に有効な環境となる。個人の視点や経験そして表現を重視する環境は、変化に適應する人、そして変化を受容する人々にとってエンパワメントおよび相互理解への基盤を築く。美術館のように地域の人々、旅行者、そして新しく地域に参加する人などが出入りする場が、地域コミュニティにとって、そしてグローバルなコミュニティにとって不可欠な存在となりえる。さらに、作品について言語化された内容は、新たな作品評価への道を開くだろう。

現行の言語教育プログラムは移民を対象にするものが多いが、対象はさらに広げることの可能な柔軟性と効力のあるプログラムである。方法論の研究などから言語能力全般（母語も含む）、観察力、分析力、表現力、相互理解力、他教科、他専門分野にも効果があることが認められている。実際に、医学部生、警察や情報機関の職員、民間企業社員など多くの分野で研修に活用され、評価され始めている。

事例として、アメリカのポール・J・ゲッティ美術館、ハーヴァード大学美術館、オランダのステデライク近代美術館および Foam 写真美術館、デンマークのソロ美術館、ルイジアナ近代美術館、イギリスのテート・ギャ

ラリー、日本の徳島近代美術館を主に取り上げた。具体的なプログラムや教材の違いは、プログラムの目的に応じて、また作成者によって生じる。しかし、共通しているのは、「アート作品を解釈するのはあなたであり、多様な解釈が可能である。あなた自身の経験や感想、解釈は他者と共有するに値する」という前提である。こうしたプログラムは、言語学習者にとって、間違いを恐れず自分のコメントを発することが促進され、エンパワメントにもなる。さらに、自己再発見や他者理解のステップにできるだろう。

比較研究には、既に教材を出版しているプログラムを長期的な取り組みの事例として主に取り上げた。それらのプログラム開発の発端、主導者・機関、予算、担当者・部署、参加者、運営方法、カリキュラム内容などを中心に比較した。自治体や美術館、担当者など、さまざまなイニシアティブと開発・運営のパターンが認められた。これらをモデルに様々なアプローチが可能であることが重要な点である。

また、現在のミュージアム界におけるプログラムの評価にも注目した。国際的なミュージアム機関である国際博物館会議(ICOM)や、EUの移民時代のヨーロッパ博物館研究プロジェクト(MELA)、アメリカのアメリカ博物館同盟(AAM)、博物館・図書館サービス機構(IMLS)、全米芸術基金(NEA)、全米美術教育学会(NAEA)での評価や取り組みにも、こうしたプログラムの需要が顕著になっていることが現れている。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

木下 綾、「美術作品を活用した学習の理論と実践：ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ(VTS)のワークショップ参加から」、アートマネジメント研究、査読有、16巻、2015、72-79

木下 綾、「Sustainable Management of Art Museums in the Age of Global Mobility: Language Educational Programs at Art Museums」、Graduate Institute of Creative Industries、査読有、Shih Chien University、2014、167-178

木下 綾、「アメリカの美術館における言語教育プログラム：語学教員向けワークショップのフィールドワーク」、東海

大学外国語教育センター所報、査読無、33号、2013、79-88

### 〔学会発表〕(計6件)

木下 綾、「Art Museums for Local and Global Citizenship: Empowerment through Language Educational Programs」、第8回インクルーシヴ・ミュージアム国際学会、2015年8月9日、ニューデリー国立博物館(インド)

木下 綾、「グローバル時代における美術館のレリバンス：言語教育プログラムからの考察」、日本文化経済学会年次大会、2015年7月4日、駒沢大学(東京都・世田谷区)

木下 綾、「Museums in the Age of Global Mobility: Through Language Educational Programs」、国際セミナー「ポスト工業社会におけるツーリズムと持続可能な発展」、2014年8月19日、アイスランド外務省 レイキャビク(アイスランド)

木下 綾、「New Relevance of Art Museums in the Age of Global Mobility: Language Educational Programs and Their Implications to Art Museum Management」、国際文化経済学会、2014年6月26日、ケベック大学モントリオール校(カナダ)

木下 綾、「Sustainable Management of Art Museums in the Age of Global Mobility: Language Educational Programs at Art Museums」、創造産業と文化経済 国際学会、2014年3月20日、Shih Chien University(台湾)

木下 綾、「Art Museums in the Age of Global Mobility」、文化経済学会第二回アジアワークショップ、2013年9月18日、丸亀町カルチャールーム(香川県・高松市)

### 〔図書〕(計4件)

ポール・エリック・トイナー著、木下綾翻訳、ルイジアナ近代美術館(デンマーク)「ルイジアナ 美術館ガイド」Guide Til Louisiana Museum 日本語版、2015 総頁数 160

木下綾 他、日本ミュージアム・マネジメント学会事典編集委員会編集、学文社、「ミュージアム・マネジメント学

事典」第 III 部 ミュージアム・マネージメントのキーワード：言語教育プログラム、311 頁、2015

木下綾 他、ミネルヴァ書房、「北欧学のフロンティア：その成果と可能性」第 7 章：ルイジアナ近代美術館 アーツ・マネジメントの視点から、126-141 頁、ミネルヴァ書房、2015 年

岡本京子 , Benedict Rowlett, 木下綾, Sara Ellis、成美堂、「English Challenger リーディングに役立つ基本英文法」, 2014、総頁数 92

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

木下綾 (KINOSHITA, Aya)

東海大学・外国語教育センター・講師

研究者番号：10609407